函葉集

二

元禄二己巳春

うんかやくたちかたき葉ゑ　芭蕉
次ものくるるの音くれ　嵐雪
夜明　うるゝ明るもたはたく　〃
七題　山を　出る　自　蕉
町　つゝり葉の色ゝる砂をけ　〃
寒〃も　くたく　泊るるの血　雪

切るとも老いそしらぬ
七の解つゝ神のおろし　蕉
生けるよりうえたく畑り毎となり　雪
日くれて　おる松の切りけ　蕉
去白き塩をつまむきて　雪
洞ふ　ほをよこし　めくすり　蕉
舌根を怎化をやゝ居士衣　雪
小城ハ稲の中にはつる　蕉
杖をうゝ　庄次の花よりなり　雪
いちりふもんやおそ拾の月　蕉

ちるこれを垣根をうつる嵐富　雪
かをるゝ　蕉の下しも　蕉
分のゝさ　ゝ子の足跡ほそく　、
いつこのゝ　梅の名をる　雪
紫うきのふるき新ハ　破ぶり　蕉
憤もよんより　蟬ハ　足石　雪
よりの思ひてうせる秋の風　蕉
髪切育の月うゝ　の光く　雪
出門より西の体の根とひゝ　蕉
粥ふ　卵ハ　なくとゝ　雪

山茶花の咲ハ多仙橋づくき　蕉
雪うり鞠おく　ゆ　賈う　る　雪
やうもむ大江の春ハ八軒家　蕉
削り屋ふる　怖笑のつる　雪
池深及も之とくのさ金のゆた　蕉
孫宣ロ　筑う　神も咲つく　雪
花くもり絶もものを　ゆくん　蕉
共こい〳〵と　田　花冷る　雪

衣鉢して桐ある白ひ水　曾良
嫁ゆ〳〵き　入ゆ〳〵の杉　峯山
きわ〳〵ゆ潜る雪を美かゆん　路通
石のくぼ〳〵に　墓をすりなを　芭蕉
月移る　窓の蔦を　ゆ〳〵く　山
のゆ〳〵　張り　帰る草畑　良

街のるゝ行意あらふ杖の風　蕉
あるるゝうゝ名ゝ窓のもりけ　通
ゆらさるく為ゝるゝ由の根　山
ちのるゝ鼎のふゝさよ　良
ふるわもて杖常れぬ大の夢　通
夢の現義を　山
冬遊りの酒のるゝ　良
月もを夢とみむ論るの市　蕉
物宗ふるのめに打ゝ　通
氣をを名を君ハ切ゝ　蕉

花のを宮のをまりにる世ゝり　通
古巣の旅の　良
ふをるゝ夢　山
諸堂を俗道ふ　良
なるふ　蕉
形代を俎筥ゝ　蕉
ゝ罪のすゝ　通
屋根葺も氣ゝ屋不彼の関　良
桂おるる　良
田の中の小田　山
時ゝ　通
氣りのをひゝ世　蕉
人

はしを立てもとすれは 吟ふて
うゝれて海の中のゝ月すゝ
枕よ 月をたく宿の夕月夜
つゝれをうつき 岩のふくろう
火をゝけハ岩の洞みをゝうゝ
岳をなゝたの こゝ吹れ
おゝつる 父ゝゝと言ひけて
折ふ のせるゝ ゝの秋ゝの
入るゝ ゝの花の夜
何ゝ 何やゝゝの ゝ雲

山
良
蕉
通
良
蕉
通
山
蕉
山

功なれ名遂て身退かゝ 義経
あやうしと 天を仰ぎ 芳良
松ゝ風ふうとものゝ ゝの 嵯峨山
月ハうゝうゝ 猿の鳴ゝ 此筋
いにしへも 名ゝ 良
ゝをゝくゝ ゝの秋 蕉

羅ゐてもかりそめ　筑
納ふりそそぐ　伝の　松の　山
五月雨小袖のうらもぬきあへと　蕉
ふる袋を　ときうるうつて　良
高ゐてこそ人よりもぬるる　山
細く出るふるのやさしき　筑
雪をそそぐ決髄とりまして　良
ふ高　詠り日　結つもる　蕉
拍の音も交ハ交をそう吹ふる　蕉
相のうら立　ふけれ　嵐蕉　山

旅車　ゆる糸ハ　月とそれ　良
波ハうしろの不二をうしろ　蕉
高吟て沖ゆ　れいの鈴　蕉
大小迫　ちれむる　良
蛛小のそう雪時　山
起て火をふく篠つきつま　蕉
炉ゆり出ひる修る星月　蕉
組てこうせハ　麻衣なりそ　山
山風ふきしく歳る栗のいう　良
ふる本ふ人へる宮の小屋　小鍋

泊りなんと分を平伏むねさん　蕉
あるじの百合なりけり　葉
猿の妻して明る夜の月　嵐竹
あの岩屋よ仏きたりて　山
麦ぬまん流坊の温泉のあくり　蕉
旅もまたる　実のくちの　良
何れよ人の従者と分をたけく　葉
猫よ居れハ　朝のさやき　山
一門乃ふ足の鼎のさまくり　鍬
炭をつくる　椅政の夢　竹

那須余瀑墨概をたつねて

抹香ふ人を尋とりけ文望れ　文宝
まさき いらことこ所ハ　椿の葉　翠桃
むらゑよ市の仮屋を吹とりく　ウ良
町の中川　川打との月　蕉
雪のふを夕ふ花ふ　うるおりく　桃
蕨乃すゝ忘れ　ちりめんハ　佳　良

おいとゝかさよををかゝ入る
ゝゝれさゝゝのつゝきの今
ゝゝゝかゝ火を焚ゝるゝゝ
盆人ゝゝゝ二十六のゝゝと
れのゝゝかゝ後をゝゝてゝゝん
ゝゝゝゝけて迷ゝゝゝゝゝる
兼れゝゝゝゝゝかゝ炭俵
きゝゝゝゝゝゝ尾ゝ迷の居
あのゝゝゝゝれゝゝゝ然ゝゝ
ゝゝゝゝ消む絢のいゝゝゝ

蕉　翅　良　枕　蕉　枕　海　良　枕　蕉

絢繡ゝ付めゝゝかゝのかゝゝゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝの小車
日傘ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの庭
ゝゝゝと　枝ゝゝゝゝゝゝゝ
酒のゝゝゝ谷の柄ゝゝゝゝ仏なり
物人ゝゝゝ　泊のゝゝゝ明
ゝゝ武者の盤のゝゝ写ゝ茶枕
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの言
日中のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一谷ゝゝゝ　夏湯の茶　也

良　枕　海　里　蕉　良　枕　海　里　良

元禄とは云て浮世の物語
洞の地蔵よこりる有明
菊の露ハ猿のなみだ成
夕をとゝろく 俳人宋州
ゝゝも又数日を物むつの
笑とゝきちゝ俳のゝ
簾の外 ゝゝとゝえて
更の風雅をすのにもつ
ゝゝゝゝ俳を学ぶ為
俳を ゝゝゝゝ の味

梅 枳 蕉 里 蕉 二寸 良 梅 秋峰 里

風流ゝゝ年更の田植ゝ 芭蕉
いちこを打て ゝまゝけ年 鶯窮
水せきて ゝねの ゝ 書ゝん 以良
節よ 袖の雫 いゝ ゝゝ 蕉
一年て月よ ゝ ゝ 川柳 窮
庭 ゝ ゝ 村 ゝ 秋 良

街の女の上流を伝ふ業をたゝて
芝をたのしむやと浮むしきりの
あるは時代物のゆめの入れん
樟の小枝を　意を尽して
うゝてハ嫁の留の名もあく
表まる　山やしかもうけ
酒りハ軍をこゝる　関を来く
扶をする分とものゝ　俗
文る数の望つき砕る麻の角
浩の　山　物を注をる月

意
窮
良
意
窮
良
意
窮

いろ〳〵此行を宗とこのうゝて
彩ふ〳〵をつゝいとゆ
山の尾をゝ〳〵ゝ平むゝ
弄ゝるこゝ清和つゝさ
新彩〳〵事丹一筋の絵〳〵
出の〳〵武士のゝこゝる高
節こゝねゝの凡意の芝ゝ河
言よめこゝ作ゝ名和〳〵
自まゝたゝゝ絵を作〳〵入て
行やゝこのゝ作〳〵ぬ七夕

窮
良
意
窮
良
意
窮
良
意
窮

位なるやうの程のけしきを
すなはちむかしの衆の製　蕉
切樗　枝ならしたるに雪降
たる山つゝきの景うつくし　嵐雪
降しやゆきをくくるまゝ　良
教生るのゝ下草　嵐雪
景をきるに折りをひとて　蕉
酒のまよひの先しるる風　良
六十のはつる人の面影　蕉
磬囲する鈴ゝ小神うたゆる　嵐雪
良

偽れる鈴や目たゝぬ苑を新たに衆　文蕉
まれなれるものとなる寄人に　雲竹
切籠を山のみれば負の花　笑狐
時つるひすれ　不孤　樗　良
たゝ移る美業の月の雲こゝ　雪玄
秋しるうの　鍋　なるの花　次等

梓弓矢の和比嘉を尋ねく
新玉をたづねるあり うきの夢
松嵐冬に吹よるまくの書　蕉
酒のそこ涙をいふ こころ形　雪
智入多雑に夜なれ　良
ちれておくれる 俳諧のつま　雲
負しさを弁まもる拙さく　竿
月のもつをこころより人る　葉
独して河魚ゆうしこる歌　雅
笠の塔をする芦のくら 拙　高

物より出く初雁やよしの八苑の月
ふるる名よ 狐敲 打く
あるほどに夜をこそ夢
ちゆる山れは黒髪うつき
よる雑をいるつ夜しく
加一一琴の孫中をさた
俳諧の夏山人 古沢のさま
扑をうる 市の酒酔
新俳に三社の泡をいきて
乃至人云 行と 四云つの

蕉
良
葉
雅
竿
蕉
高
雲
良
葉

[illegible]

行 高 宣 良 延 行 業 高 良 宣

[illegible]

宣成 一業 以貞 川水 業 兼

俤を枕に立る心地して
松むしのなく音のさびしく聞
永禄の末に貴殿といとまきて
爰て会する大雪の我
意の方をわうちとりてる
凡夫にしれる形ちの石
書物を繰て見の這入る
物しる人は苦る 秋風
ちうる年の月て彩られ
沾うてとくに出る

永
良
慈
栄
永
良
慈
栄
永
良

花の咲ける枝をおすまる宮山の
孫を尋ね 山うの 塔
探る村八宿をの命の長さて
刀うりする 甲斐の一乳
薄垣人もとなる 実になり
りの出るにより 制る 松の本
星祭ふうこハしら れうること
集は 拾女の名をとる 月
麻笛は 夢をおうう ゆう長話
味うりに 出るる 話をする

栄
永
慈
良
永
栄
良
慈
栄
永

稀なる候本堂を屋のうちにはこれ　慈
きくくとなりすみ　みなの泥　良
古里のおとと沈とうりうり　永
ちとく鳴する永世のうり合　栄
雪こそ仏師光の市のなりて　良
すてきの日をそなる　露のあ　慈
亡人を古き時殘れようへられ　栄
やるかくしの恵に入れ　永
年つくこ墨も弦へきこの考　慈
山田の稀をいとふ面　良

有難や雪をのをくれ風の音　文政
住居と人のをとふ　夜学　露丸
川舟の綱は雪と引たて　芳良
物の光沈は　今日ある事　紅雪
沈みにてをうる蝦の音　殊妙
小も弟も　きわ　打ちち　梨水

既て八月廿九日なれば
石山の旅を出て本堂の牛近
山にたどりよる地の記を尋む
分け出すもの 神木の杉
家よりは此方にひかれ動くて
立ちかわれハ 行ちかく見
古仏にをるにかゝる拾遺書
寺に出校よりの歌
月はたゝと引起され初き
繁あるなる
歌の家

宮
歌
丸
良
宮
丸
歌
水
良
歌

よりたゝく犬のうたゝ
的場の寺に 此寺山門
寺を弥七つのたちうえ
汲ていたく 弾弁の水
立引のうたゝ 拾遺の
つきの門か 二重屋にたち
かき清る貴ハ地中の地蔵
つる 立する
うたゝに 椿の和尚の
温泉の香よりたる地獄よ

丸
宮
歌
丸
良
丸
歌
水
丸

籠の鳥を物語る矢をとりて　宮入
簾かけしるる西はるれば　良
月山のわくの風う骨うむ　知丸
鄙びたる鄙びた　電のうけ　宮
たるうしの物語る矢　心た　義
哭る　鶯く　うる義の高　義
登人ゝつれ行ゝ嬉ゝ身を出て　良
形も高れ　風くの形　舎芝
色のさ　れ　海すの風　氏
まくみ　る　色の華

池たつ稲ゝ新高せゝ　彼れうや　風海
くしめてゝる　風のたゝ　さ高
巣作り秋ゝ芝をとうゝ　孤松
寄立うゝ　虹のりとゝ　い良
うゝ二ゝ海ちり　柳風
る市ゝれて弱逸一きむ　京

蓋　縁なる父の　ちなみ伝へ
泉　拭ふて　おもかげを　ながめ
良　物うらみ　ながめ　なほ　慰
泳　すれをあけて　とりかつて
柳　こゝ　さうる　夏　古の　ながれ
木猪　浪の音　ゆ　ー　ー　ながれ　を
風　ゆ　ー　ー　ながれ　ハ　色
柳　ゆ　ー　ー　ながれ　ハ　色
蓋　雅　のつま
杉　ひ　月を　物　の　小　社　て
猪　ゆ　ん　と　ゆ　う　く　く

ちるゆのなハ　ゆをを　ゆをを　ゆく
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
たのひと　ゆを　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
泉　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
猪　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
武　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
月　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

蓋　良　泳　猪　風　柳　蓋　良　猪　泳

秋うのて拾ふたらむ蓑のうら　柳
うしひすまをるこの岩くを　蓋
蓑るはかりを弱る夕まくれ　風
出城の猫よりゆるうを火　端
きるは佐沖のうれも深りて　蓋
よこれてさむさ祢宜のし波　波
ほるもしこのうの岸れ　風
しうはるもあのつれ　柳
咲うるをたよ袖しよて　端
学うこてしまの高　良

袖之浦江上晩望

あうるやうく海うけう夕　海　大色紙
海松はうる磯よしむ　抗延　不玉
月むと関屋をうむ　海松て　つ良
七りの竜乃々うる　蜂風　蓋
市してほりよきる多　柏　玉
蓑のたまとうよ　蓑の毛　良

雪屋敷ゟ 物何の帝王の
火をたく煙の たまて
満ちハ今ちもうきを切せをも
松ちたる 武蔵の 玉屋
ゆきもうなつきを思ひ
故の郭ハ ト ことと 良
出仕してあてをもん 蓮
て乃世ハ来も 今しの人 玉
紛つゝ書常ちの ゝの 良
今ものいのちと 物の 蓮

加きる郭 みなと乗夏扇て 玉
松ちゝの物ハ 麻 仁の月 良
物ゝ 研ちゝ ちの風 玉
すゝ 游よ きゆるひ 蓮
剛力の 游つる 世仕ひ 良
板を をゝ る 塚のゝ 玉
紙表ハ ゝ 岩を 蓮
元ちの きゝを 踏ゝ 法 良
型一ゝ 屋を 俵ゝ 玉
月ちゝ ゝ 蓮

佐中の市

御輿は真葛の奥に隠し入　良
小袖のまゝとる戒の師　玉
我のほの母に似たるもゆかしくて　蕪
身にはめくれね我ハ仏とも　良
なら坂の京指傍くる古今集　玉
冬に蕎麦切坊の酒蔵　蕪
しのひよれ菓子を立たるねつらね　良
盤たらひとこえて第身に丸　玉
錦木を作りて古き恋をとむ　蕪
しるゝ色をこのむ言違　良

めつらしや山を出羽の初茄子　芭蕉
せミに車のおとそふる井戸　重行
絹機の暮いそかしう梭を打て　曾良
閏弥生末の三ケ月　呂丸
我顔にちりかゝりたる梨の花　行
銘は胡蝶と付し盃　翁

山のそこにきこりの帰るを舟
藁なとに乗てハんとまちをる
栗稈を日とのの舟よそひ跪く
ちのらうを初るこの戸
赤樗を母のうたに抽おれ
花よ　紡す　小田のうあ
山秋も門乃板橋くつれたり
教えふすれくそうそう月
きぬ〳〵ハ袖をしぼる雨しきの袖
宿の女乃姑きりの　ゆ

丸
良
蕉
行
良
丸
行
蕉
丸
良

婿入の旅ゑるこたに打もれて
りとの廊ハ　物よ　焼ける
金弘の書も一ふる　改り
なふ良の　物よ　豆腐問しる
山吉ふ見わたれと　答あけて
行ゆきるこたに　見し
ゆきるけさハ風を　法そすつ　永
仏〳〵　衣を　うさせて
子日の春を　結ふ小杉原
蝸牛のうを　待つすす春

蕉
丸
行
良
蕉
丸
良

力ハ蛾の穴ことゝ爲や芝つん
こけて寄たきをとゝ
ゆくるを月をけり御のそよゝて　行
温泉ゝゝる　信夫の秋風　蕉
ゝ原の秋より山のたゝ　丸
山そゝ作る　ゝの夕きゝ　良
尼ゝゝも男ゝまたるんゝて　行
けりゝゝへきゝゝのゝ捨　丸
谷の村ゝとゝゝゝゝる　蕉
敷ゝ蕉し　ゝの夫　良

鈴ゝ蕉盤をゝに料理成ゝし　文政
絶ゝさまゝて秋の日の影　一泉
月ゝゝけ水の来にる次て　左化
すきるまゝ村の生垣　ノ松
秋鄙の門をゝゝて稲の香　休意
小橋のゝゝ　ゝ　洒子
ゝゝ生ゝ　ゝの　雲口
ゝと　敬せる　ゝの蕉原　乙州

よゝ野ふかき所なる山地にて
ゝりしかれハ雪ゝに出る月
孤屋を吹ぬけ来るたゝ
ゝ立本ゝ　千ゝ
ふる雨ハゝりれゝ中と張紙て
ちくめきこゆるふしのさゝ目
糸ゝて麻ちに紙ゆゝ　意衣
わしゝゝむへゝ　きゝのゝ
学の戸のふるゝゝ　ゝて
ゝる　わしゝゝて寿老

如柳
小枝
芳良
流志
泉
蓋
枝
口
流生
良

馬ゝて遠近ひゝゝゝれ
ゝれ望れゝ　山のまゝゝ先
月ゝと角力に待ゝ　ぬゝて
鶏をゝゝ　やゝてゝゝ
ゝ閑ふ猟の光込ゝの音
紫ゝこゝ　今のゝ

小枝
芳良
久世茂
枝
良
無

わたくしの父は　黄のち
拾女は　白の人　四合　ふくれ　良
為ちよ　ちよ　ふ　君の名も　ゆく　蒸
賢ハ　ふ　ふ　ふと　魚　ふ　なり　枝
蓮の糸　ふ　ふ　ふ　中　ふ　花　海　良
先祖の　糸を　作　ふ　ふ　門　蒸
ふ　の　糸　の　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　枝
為　を　ふ　ふ　ふ　擬　の　ち　作　良
秋風　ハ　ものい　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　蒸
しろさ　放　乃　積　く　葬　礼　枝

ふ　れ　の　名　ち　ち　ふ　物　の　町　造　良
ふ　を　の　ふ　ふ　ふ　ふ　仍　の　箱　蒸
出　京　ち　ち　ち　ち　ち　ち　波　の　貝　枝
沼　の　小　鶴　と　ハ　ハ　ハ　焼　良
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　蒸
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　と　明　く　夏　面　枝
強　小　独　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　の　黄　の　古　風　ふ　蒸
北　蔵　人　ふ　れ　人　の　ふ　ふ　屑　、
略　ふ　ふ　蔵　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　枝
わ　れ　ふ　つ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　月　の　紙　、

砂糖心その枝をおりて　蕉

小侯もりつ　伊勢の神風

庵廬八重の日陰もくやりそ　牧

るくれなゐの枇杷つくるなり

細なるうき　仙女の姿　たとやえた　蕉

わうるをしほるるをしほ　派

仲秋の名月の細代と折るる　枝

ちる　丈を　たれる　以上

遠樹　樹く拾ふ　花もちるる　蕉

破　和　人と　活を　元州

二とせまりケるる　蕉の百ちる　弟

少のちひ　落葉の下　落道

残れるむケるる　月すて　菓夕

あるるたハむ　白之

枝木やハらぬ木ち　形を　陶淵

食のとまぬ　とハ　おちん　いる

紀ゆきて人まちをる夕まぐれ
見るこのすゑ　はるのとをちの　夕
遠
焼ものゝ名ゝ名たる彼し　彼れ今
衣
細ゝ　年してぬきかへし入
木国
簾ゝ　荘の名ゝ　明ゝ　ゝ
衣
月見わたりきし　ゝ　ゝ　ゝ
之
ゝ　ゝの貝　拾ゝ　ゝ　布袋
蕉
地獄　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
通
ゝ　ゝの　ゝ　ゝ　ゝ
因
待ゝ　地　根　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
衣

是　腐　ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　之
ゝ　の　第　ち　と　仮　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　月　や　ゝ　ゝ　甲　と　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　夕
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　良
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　衣
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　通
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　蕉
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　之
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　衣
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　通

四条宮下野集 秋

夕月夜 蓬の門の入くち

夕月夜 蓬を隠すつきくさ

うつくしきつきくさ 秋の夜やな

長月 公こに彩色のあとをとゝめ

夕 てや過きのうつきさ 株わけ

通 おもしれてえやをとる 朝ぼ

之 変もうつりて一りのまく

蓬 奪ふをうつきくさ 蓬の

夕 小てゝゝゝゝ 蓬のうけ

宇

いにしへも老りおうむおわれ

おなじ 蓬 つきくさ仙

四幕の凡やむ 世界 蓬

長 角カくむ月のもり

蓬の忘草の仮名のおりしや

ゝゝ歌る 蓬年の図 蓬

亡蓬

良品

搨風

之蓬

亡芳

半秋

弱双の男子を家に打打て
りのふちも 縄の若しよ
為のうの 平侍る侍士うる
ばれたすけと 見れまうる
見ぬ 秋しのひくるとれうく
待もうてやまれり 芳
るの言 侍軍をのとりに 蕉
自入るふ のいよ 風
扶凡のまれ八を出て 砂
筆に ちりり 蕉の山荘 品
蕉

為をれ小京小源る家の居
和り 扶へく 芳の系文 蕉
秋 立く 耕るを うる 風
芳の 元 秋 砂の 蕉
ふ京を之下の白を出 品
立 打 夏 砂 の 蕉
若生 為の 卒 砂 侍 蕉
母をれと 弱 ふの戸 風
弱を 別 小 安 弱の言 芳
凡 仕 あ ふ 酒のの中を 蕉

世の中はきもん界をる様子の
俳句をれは仏にきりたる
孤猫性八月をくるしぬ人
俳の解をる　名月の夕べ
女房なるまくなるとふ変く
うさぎ　をれと時はわをる
をれまてたとえ者ぬ音の糸の
白髪なる　神ゆるしつる
たえ者の　嘆より　をれを
除く　をるをまてる　墨

品　俳　風　蕉　風　品　芳　俳　蕉

ふるゝ　やうさ　ふる　稲　品
をる　陵く　雪の　方ところ　蕉指
駒の　ふる　垣に　俳を　作く　芳代
秀乃　初　今　ちほ　きう　歌人
宵明の　雪は　人乃　けも　蕉笠
をれ　ふる　入る　者　舟泉
俳　ふる　ふる　雪　雪水
芥子　て　作　疲　村　指
袴衣　紅　白く　れく　蕉

あれ髪をうちに生るいたく
精出しく重る枯れんとすく
るをのこ〻蒹葭伐やう
雨ふれ朝霧のあるれも
況しうして居る秋也
糸をくれ巻きたる月の下
まる目のさめ眉のつく
思ひて逢つき事れたち
出れり塔の行くかたち
まくと動れるものとうて

竹人
笠象
水梧
象人
水
笠

破れてまるめる竹籠のこと
夕れい鳴をもきゝわ蓮池小
竹ふるさまれ思も
迎伸る木陰のるれ居つ道
まをうれ蒹葭
打るれも張を立て扇
女帝光の月とちる光
雪の月のまれに泪流る
煙鬱く塑の引れて行く
砂原の川のうに言みく

蓋
竹
水
蓋
梧
人
竹
水
笠
象

[illegible]牛を小舟に乗せ　水

そそろかく沖を漕ぐ

わすれてやすらと焼く笠舎　如行

雲の文[illegible]作[illegible]　夕道

舟あてに[illegible]　荷兮

汐のそやきをこむる海老魚　野水

海[illegible]て山をとる蛍の月　芭蕉

焼つくす秋の[illegible]　涼

[illegible]　越人

深[illegible]　芭蕉

蛍を[illegible]　〃

理をはかれる　梅のゆ書　人

瓢　筆乃大きさ　〃

風[illegible]て帰る市人　蕉

なれ事も出あるゝ乞名利の地
醫者の多き所に居る所
いうゝと師走れ所に出る
ゝゝと言やゝ寺社詣り
けれとに古き書の名をつゝ
出る話とゝ雨れあけ所の
きぬゝやわらうたくあてやた
風もよたゝふのうゝ
もつゝ屋敷は猫もすつゝされ
細殿とゝ舟ゝ

蕉人
蕉人
蕉人
蕉人
蕉人
蕉人

月とゝ氣比のゝ根をかゝ
雲在嘶れゝ乃肌ぬき
彼れ戸の行ちつゝるその果
みゝゝゝゝきゝの云きわを
知なくて猫ゝ包む十寸徳
ものゝゝひゝゝ神ゝれあい
人去ていゝゝ世の白ゝ
ゝ涙ゝこゝゝ堂ゝ偶
ほゝゝ嵐のゝゝ中ふ
酒樽乃ゝを為ハゝ

蕉人、
蕉人
蕉人
蕉人
蕉人
蕉人

あやみくさ刈る妹がゆふなぎ　人
なのをもいたがなるまで色むら　蕉
秋月乃うれ行て消ぬるに　人
よわるさし　をしく鶏よ鳴ぬ　蕉
鶏の面をうち打ぬる事ぬもうく　人
ほいく　なるうち文を開さる　蕉
いうめく風ふれ　ぬ事屋　人
就を　すれ痩てひるき　蕉
それの比　清秋　あるうち　人
田をうつて　解きうち　蕉

たゝ見て　吾見る面る　残衣乃　芭蕉
凍て　居る　古　捨てれ　蓑　昌碧
松風　祈　る日向の　すれて　亀相
鶏　白き　切て　打りて　荷兮
小河　うれ　切て　うの　秋の　雲　野水
雲　山　の　絶て　月の　一　ち　雑音

きわ〳〵やとりて秦を作り
用ひらるゝも知るべからず如
斎の事はいつもうけよりて
作り仮の家のはたらき
をてまうる布を若き民
洞うつるとよりハ考えし
門仕のうたんる人ハなうらら
後小雨ふる うゝひれ拾つる
よき行にねなうねのきわゝ
和ひるなりと猶つゝ月

越人　舟象　蕉　相　琴　宮　人　竹　蕉　琴　象　小

うゝと雑俳小野のまゝれつる
時ともしして何すゝ
尼寺の毛雨續くゝとと
絹べなれい ゝの とゝ
ゆゝうたの新よゝ書ゝ
布祝 二本 春ハ作りゝ
作り時をあゝ人も書
食煮書をゝく法ゝ
筑立のうゝハ酒ゝれや
作り製刑ゝ 鴨川の水

相　琴　蕉　竹　人　宮　琴　相　琴　象　小

雄の音に若の衣も身に沓ぬ　相
ほうきうんかの咲てゝいるけふ　人
月しのゝ火鉢を消てすると入　乃
ものゝふゝ見をおろし秋風　蓋
けれを始て帰る雪の中　象
山雪と〳〵雪初る　雪
そてうけて丁数法むらたゝ　梱
いつゝもふゝるゝ分むの法　水
蔵れ中ゝ月ゝ桂やゝる来　茅

そゝ秋や海ゝ
そゝ尚の波ゝ
そゝ春ゝ改

初秋八海中ゝ田中ゝ　之世
ゝ月ゝ　ロ　ゝ月ゝ　年辰
家庶　雪ゝの中ゝ菓を敬て　紀是
やせゝる敷の井ゝ　ゝ風
蛤のゝ　ゝとゝ　ゝ砂ゝ　安宣
望ゝ月ゝ　ゝ　ゝ　自然

白雨の雲つくりかけるの御
用つとめ出行一湾の船とのの人
出気うしなひてはうろうろ物やとりもむ
ものしく　ゆきれ　をの国人
琴琵琶弾くを育ハ泣て明す未
弱箏乃きくに知れ　ろう　髪
新ちるき　色の鬼のうけたし
施餓鬼　入相の幔
海潮川むるを角力とりそめ
楷切りき　月を眺　ちり

風　足　風　癸　宣　辰　篇　風　宣

鬼の雷雲にみきるきとりや方
ちゆりしるき　寺のるる　牛歩
潮雨の稽なりそは　たくしふ
白鷺　をく　歳をうれ市
芝をれ朝喜をふ　布ちる
ケ一七日　戸燈　ゆきて
かしるる　白そのくをとをう
書くゆきん　人ハの蚊
海われ　紙を　御堂を焼こ
むう　和うゆ乃　牛垣

足　宣　癸　篇　足　歩

之のこゝろは　ふるる葉の秋　榮
魚つむ船の　岸ちかゝる月　辰
高の里の　鳴の元食とゝろく　茅
次第よ　さむしよ　吹くれの風　足
猿のなれ　鹿なつかしくまよひ　宣
うすも　澄も　葉の戸の伽　茅
石かゝてうさうなる　庵のうち　風
杉葉　帰るまた　ほくしつむ　足
かんたふ　ふるおの　娘うもれく　宣
古てふを　ちやす　嶋　うれ　茅　榮

貞享五戊辰七月廿日

於伊賀　芭蕉翁　毛虹　奥行

葉稗　よ　風　月　くもあるに　茅屋　くもあ
やふ　乃　ゆ　ふる　人　申る　青柳　毛虹
燈の　る　出　月　雑　屋　る　ゆ　荷兮
月なき　沼を　ゆ　ふる　ゆ　あひ　一竹
ふる　ふ　と　人　のゆ　ひ　元　ふる　ひ　逸人
葉　ゆ　ふ　て　屋　根　蓑　ゆ　胡及

本れ葉ちる板のすきまより月
ぬれてうちあるしらつゆ哉　蘭洋
遠ちかく板の隙より秋を
知るしるべや　虹花
あつけなくちる　繁れ　ぬさく　兮
知らぬ　ちるも　知きらるる也　丹
石蕊もあらはれぬる秋の月　人
義をしらて　力わすれる　及
大ふるして　ゆるとのこゝ伊の光　洋
しらぬ板の　ケ中　ちる　雲　ちる　苞
　　丹

面白ようすいしゝ苑のうしろ　兮
外　ゆひそへる　新の色　虹
日和ちるふ六月あひのかゝよく　笑
本る　虫　て　ふも　平　本り　及
いろ是　下郎つまりて　興り　洋
切葉をとりうけすてきゆの蓋　丹
ちるしの言うとうたるの新　人
人一代の意を　ちる　秋　苞
板しせいこをの服をもりも　虹
きしをくなれと新を洗ふを　人

懐に探し拾くまろとられ　及
下戸をふくめる雪見の亭　兮
早咲の梅を手本にたしなみて　義
嫁せぬむすめは眉のこしける　洋
思ひねにすゞしきなれば垣の奥　及
滑きや汐せる川のかり穴　人
明やすき枕をとやかく独言く　兮
仏を祈りし郭公やら　義
花よくる硯の墨をすりのこされ　洋
すゞれたりとはまされ夕暮　虹

隣家として寝覚師走の夕月夜　古成
庭に人せゞしく凍るらん雪　一井
とやかくと覚をあげる茶焼て　誠人
我謙を今ゝ御幸有けり　昌碧
堅持の莚のうへを流しけり　荷兮
情子あくれんきゆる焼大　野竹

[illegible]　東籬

[illegible]　蕉

[illegible]　路

[illegible]　兮

[illegible]　作

[illegible]　驛

[illegible]　蕉

[illegible]　人

[illegible]　兮

[illegible]　路

餞別會

[illegible]人と[illegible]れんとしれ　芭蕉

[illegible]　由之

[illegible]　其角

[illegible]の心[illegible]　枳風

[illegible]　文鱗

[illegible]　仙化

[illegible]　魚兒

[illegible]　觀水

中の秋　再二一連[illegible]

鶴洞[illegible]　漢舟

神坂や伏せる波の底方　金峰
鶯と共に迷ふ　きくの若葉　嵐雪
酒のこぼれとも迷ふ岩びかく　孤峯
和歌の雪を掬ふ清くもの　蕉
緑(ヤマノ)深る神つくもの郭川　之
蕉　一面に和るあるさ　孤　角
ゑしに和星ふおよぶさを傳ふ　風
月ふや浜ん　泊船の　竜人　鐵
菊ふ花とく白ひも初なつく　化
ゆうふ幸を洞ふ　傀儡　峯

途中にたてる車に蕉之
沖こく無ふ水ふ作くを波　雪
花に和ふ名に作く波を移き　峯白
刈ふ原をうえに　苔の白　水
水の峯之川こうなに外ふ　化
蓋に和ふけめの　雪を焼　之
光の月乃波をうえ狂ふ　蕉
月　流れ　沈れ　周吉　白
水蓋に于沼の杭をうえ　南
舟を行く　舟を迷ふ　蟹

起出くまつらん酒たき
しる市寺を敷む野の
雪や乃む坂乃日之屋れ　雪
小畑乃ゆき事山る作ん　永
第れ戸乃ゆを酒(サカテ)債ふ於され　峯
つゆ今る早と味ゆ　白
蓋乃しかり面白きゆ塗　化
慨ゆ氏　乃天王　角
沈牧堅く笛吹ゆ青竹　峯
僧ゆるく陽ふん扶　風

今ゆと文字れ子昂を跳(アナリ)く
墺の絵　蜀を　あ
須弥や　ふの世の友と交りかむ　角
花しく　酒呑ますゆ　雪
竹深く日ゆれ花の木目の　水
峯しれ　春　玄乃ゆ香　蓋
之　白

國學院